

# 埼玉育ちのグローバル人

中東、時々埼玉。彩の国から世界を覗いてみた。

第3回「エジプト編」

JICA 企画調査員 廣瀬 勝弘



埼玉県マスコット「コバトン」

## エジプト編

前回のエッセイでは、青年海外協力隊の活動を終えヨルダンから帰国し、その後は埼玉県で国際協力の推進に携わったというところまでを綴りました。最終回の今回は、埼玉の後、エジプトでのことを綴っていきます。

今まさに私は中東の大国エジプトにきています。ヨルダンで初めてアラブ文化やイスラム教、中東の諸問題に直面してこの地域の奥深さに魅了された私は、埼玉で仕事をしながらどうにかまた中東に行ける機会を伺っていました。そして今夏から縁あって再び中東で仕事をさせていただいている訳ですが、そういえばコバトン（シラコバト）に似ている鳩を見つけました。鳩繋がりですら埼玉県とエジプトで友好関係を築いたら良いんじゃないかと思うのは私だけでしょうか？



エジプトでよく見かける鳩

小柄さ、尾羽の長さなどシラコバトにそっくりです

さてここエジプトでは現大統領の就任後、様々な行政改革が執り行われている真っ最中です。その一つに教育もあるのですが、なんと日本式教育をモデルとしているんです。その名もズバリ、エジプト日本学校。2016年に教育担当大臣が来日した際に視察したのが八王子市や埼玉県の学校でした。この視察を機に始まったプロジェクトに、私も微力ながら関わらせていただいています。学級活動、清掃、日直など日本独自の教育手法が目され、豊かな心や自立的な心を育む取り組みがまさに始まったところです。

埼玉県ではアクティブラーニングやICT教育が盛んに行われていますし、教育を軸にした交流が生まれると面白そうですね。エジプトの国民は教育熱が高いですし、日本式教育を取り入れた学校が全国で開校したことから日本への関心もとても高まっています。プライベートでもビジネスでもこの機会にエジプトを訪れてみてはいかがでしょうか？



日本式教育を取り入れるに当たりパイロット校に指定された学校です。

2018年度は全国35のエジプト日本学校が開校し、今後も徐々に増える予定です。

話の視点を変えて、少しシリアスなお話を。

ヨルダンで生活していた時、地理的環境もあってパレスチナ難民やシリア難民の問題を日々身近に感じていましたが、ここエジプトでは良くも悪くもヨルダンにいた頃よりそれが少ないように感じます。難民として逃れて来た人々の母数が少ないからということもあるでしょうが、それ以上に彼らが教育を受けること、仕事に就くことができるというのが大きな要因かも知れません。

ヨルダン国内には正式発表で約300万人のパレスチナ難民と、約60万人のシリア難民、その他にもイラクやアルメニアからの難民が暮らしています。一部は就労や教育を受けることができず、まして国や国際機関のサポートを十分に享受出来ず、貧困の連鎖に陥る例も少なくありません。

エジプトの実情をまだ全て把握している訳ではないのですが、それでもヨルダンの情勢と比べると良いように映ります（エジプトはどちらかというとスーダン他アフリカからの難民・移民が多い印象です）。今の生活圏にもシリア内戦を逃れてエジプトで暮らす人々がいますが、一定収入がある労働につき自立した生活を送っています。それでも母国と比べればハードルは高く、早く帰れる日が来ることを待ち望んでいると話していました。「君はまだエジプトに来て数ヶ月だけど日本を恋しく思うだろ？俺はもう5年になる。どんなに恋

しいことか。」と訴える表情が印象的でした。

困っている人を助けたい、だなんて高尚なことはなかなか言えませんが、初めこそ「なんとなく」足を踏み入れたこの中東に再び戻って来たからには、自分なりに出来ることで恩返しや貢献をさせてもらいたいと思っています。そしていずれは日本に戻るの、その時に国内・地域に還元できるように経験値をたくさん積み上げるべく勉強の日々です。

中東というと最近ではテロや争いの印象が拭いきれませんが、実際には、素朴で情に厚い人々が暮らす温和な地域だということを知っていただけたら嬉しく思います。

ここまで3回に渡って、まとまりもオチもない記事を書かせていただきました。

ともあれ、中東や国際協力について少しでも関心を寄せていただけたら嬉しく思います。

ありがとうございました。



エジプトといえばやっぱりピラミッドとスフィンクス周辺はすっかり観光地化されていますが、それでも見応えと迫力は満点で一見の価値あります